

心理學的經濟學說に關する若干の考察

經濟學の取扱ふ對象の何たるやに就ては從來多くの異論が存し、經濟學の Hauptankoppel とされてゐる。

近世此の學問が獨立した一科の學問として系統立てられて以來、永く富の科學であるとされてゐたるに對して、ロツジャーは人の研究の必要を唱導し經濟學の出發點も而して又歸着點も人にありとして、學者の注意を此方面に惹いた功績の没すべからざるものがある。マーシャルの如きは之等に對して綜合的の立場を採り、經濟學は富の學問にして又同時に人間研究の一部門であるとした。何れの時代に於ても思想の流れは複雑である。經濟學の研究對象に就ても種々の見解があり得ることは言ふを俟たない。然乍ら經濟生活は人間生活の一部門であり、經濟現象が人間社會の現象であり、又經濟行爲が人間行爲の一部分であることは争ふべくもない。研究對象を精確な言葉では如何やうに言ひ表はすにしても、之等概念の組立を導く觀念の如何なるものであらうとも、兎に角吾々人間の問題であり人間を離れて在り得ない。従つて經濟學の根底には、更に一度心理學の分野に出立ちて人間

や其本性、生活を考へ、其處から心理學的智識を借りて來て説明して行かなければならないものが多い。

從來の經濟學說總て此理を閉却したりとは云へない。然乍らロツシャ、マーシアル等が高唱する所の如何にも美しいが、其の所論の内容には幾何の心理學的智識を採り入れておるであらふ。充分な心理學的基礎の上に立つておるものとは云ひ得ない。之を外にして心理學に立脚する若くは心理的に基礎付けた經濟學說と云ふ時に、必ず先づ何人にも想ひ起され當然心理學的な學說として一般に觀念されておるものがある。快樂主義派 Hedonism 之等が如何なる意味に於て心理學的若くは心理的であると稱せらるゝか、其の基礎としておると云はるゝ心理學的智識の如何なるものであるか、言ふ迄もなく検討に値する、而して之れが此論を起した主な目的である。

此學說の發端を思ふときに、我等は先づ古典學派と歴史學派との關係に迄遡つて見ることが適當である。古典學派は Homo economicus の觀念を前提して、謬れる心理學上の假說から演繹して行つた。其の根本信條は、人間は常に理智的に自己の善を求め自利によりて其活動を導かるゝ理性を有する者なりとするにある。従つて自由競争を以て最も望ましき結果を社會に齎す所以と考へた。歴史學派は之に對して、斯かる一般的前提の連鎖の上に經濟學を樹立するの可能性を力を極めて否定し、經濟學を以て單に觀察されたる事實を分類して、歸納的に其處から原則を求め來るべきものなりとした。一般に思想發展の歴史が興味あるリズムを示すが如く、經濟學の方法論に就ての思潮の上にも又、抽象的演繹的方法に還らむとするの傾向が現はれて來た。即ち歴史學派が勝鬨

を擧げて經濟學の分野を横行してゐる時、一八七〇年代の前半、數人の力強い學者が奇しくも時を同よして英、
澳、瑞、米の諸國に烽起して之れに對抗した。之等の學者には共通する一つの著しい特徴があつた。即ち之等の
學者は新學説を樹立つべき基礎を求むるに當つて共通の出發點に突當つた。其は人間は常に快樂を求め苦痛を避
くるものであつて、人間の有意的行爲は幸福を其目的とする。能ふ限り小さな苦痛を拂ひて能ふ限り大なる快樂
を得んとするものである。人間の總ての行爲別けても經濟生活上の行爲は此の打算から起るとするにある。例へ
ばゼヴォンスは之を次の如き言葉を以て言ひ表はしてゐる。快樂と苦痛とは疑ひもなく經濟的打算の究極の目的
である、最小の努力を拂ひて我等の欲望を最大に充たさんとすること、最小の好ましからざるものを以て最大の
好ましきものを得んとすること、換言すれば快樂を最大化すること、是れ經濟學の問題であると。(Theory of
Political Economy, P. 40) 特異の點に就ての相違は之ありとするも、歴史學派に對抗して一定の前提から出發し
演繹的に立論せんとするの點に於て、古典學派の大傳統を或程度迄繼承せることは之を認むべく、古典學派に對
して多大の同情を寄せておるのも異とするに足りない。

快樂主義派經濟學の二分流たる澳太利學派と數學派とは、以上の如く共通の旗幟出發點を有するに止まつて、
其の立論には大なる差異を包含してゐる。前者の主張の根本は人間の欲望から出發して財の效用を説き、古典學
派の其點に於て客觀的なりしに反して價値の主觀性を強調し、特に限界効用の理論を高く唱へて價値の問題を擲
かんとしたるにある。之等の理論は先づ一八七一年ゼヴォンスに依て其著 Theory of Political Economy の中

掲げられ、又同年メンガーによりて其の Grundsätze der Volkswirtschaftslehre の中に述べられたるに初まる。其後十年クラークは Philosophy of wealth の中に全く異なる徑路を経て同様の見解に到達した。斯くて其起源の寧ろ世界的であるに拘らず最も代表的なる學者の相踵で壙太利に輩出した關係から、一般に之を壙太利學派と稱するに至り多大の榮譽を壙太利學者の一團の上に飾るに至つた。即ちメンガーの外にザツクス (Das Wesen und die Aufgabe der Nationalökonomie, 1884) ホーム＝インツホルク (Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerths in Jahrb. f. Nationalökonomie, 1886) ヴィーサー (Der natürliche Werth, 1889) を擧げることが出来る。其後此の學説は國を轉じて寧ろ米國に移れるやの觀があつて、クラークの外にパツテン、フィッシャー、カーヴァー、フェツター等限界效用説の遵奉者を出してゐる。

數學派は假に學派の名を冠するけれども、其等の學者の總てが共通のプログラムを有するのではない。經濟學理の説明に幾何學的圖形、代數學的算式を用ふるの點に於て、同様の道を辿るにある。此の學派はクルノー (Recherches sur les Principes mathématiques de la Théorie des Richesses, 1838) に初まるとすることは一般に稱へられ、次でゴッセンが一書 (Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, 1853) を著して、自ら之は二十年苦心の作であつて、恰かもコベルニカスが天體の物理的法則に就て爲したる所を人類社會に就て爲し遂げたと、其書の序言の劈頭に云つた。經濟學上に於けるゴッセンの地位はゼヴォンスが其の經濟學原理の第二版に至りて充分に之を認め、氏を以て自らの先驅者であるとしてより一般の注意を惹くに至つた。ボエーム

ルバウエルクは近代價值學說の最も重要な根本概念は氏によつて説かれておるとし、シユムペーターは此の書の中に其意義を自覺して最初に述べられた限界効用說の基礎を見出すと云つた。ブレンタノも其の價值論の發展に關する論文の中で、氏を以て快感遞減の觀念を經濟學體系の基礎としたる最初の人であるとしたが、言ふ迄もなく最大の尊敬を拂つてゐるのはリーフマンであらう。氏の所說の如何にゴツセンに負ふ所大なるかは後述する所によつて窮ひ得られる。Zurück zu Gossen の叫びは今も經濟學界の一部に聞えておる。次にゼヴォンス、ワルラ (Elements d'Economie politique pure, 1874) が出て此學派の系統を立てた。今日數學派は各國に其の代表者を有し英國のマーシアル、エツヂウオース、ピグー、獨逸のラウンハルト、アウスビツツ、リーベン、伊太利に於けるパレト、パロネ、米國のフイツシャーの如き其の尤なるものである。此學派は先づ交換の研究に力を注ぎ、總ての交換は交換せられたる量の關係を示すべき方程式を以て表はさるべきものとなし、此所から演繹的に出發して行く。若し單に交換の問題にのみ自らを限定するものであつたならば、此の方法の應用も自ら限定せらるべきものであるけれども、次第に交換の意味を擴張して分配生産消費を皆其の内に取入れ經濟學の全般を蔽ふに至つた。斯くして此の學派は經濟學を以て一種の交換力學となし、最小の苦痛を以て最大の満足を獲得と云ふ快樂主義的法則は、最小抵抗的法則若くは勢力保存的法則の如く純然たる機械的法則とする。従つて此場合人間は單に自利を趁ふて動く機械の如く考へられる。一般に心理學的立場から考察せられた學說であると認められ、心理學的色彩の最も明瞭なものであるとせられて來た二つの學派に就いて、以上發展の概略と其一斑とを抒べた。

兩學派が經濟學上に與へた眞の貢獻を認め、經濟學史上に閑却することの出来ない一新時期を劃したことを許しつつも、尙ほ其の所説には服することが出来ない。以下筆を進めて之れが批評に移る。

二

兩學派の所説の内容に立入つて細く論ずることは今志すところでないが、墮太利學派の所説の脊梁を形作つておる限界效用説に就て觀るに、如何程の意義を有するものであらう。限界效用説は其思想の展開の道行きから觀れば、素朴なる形における先驅者のあることは言ふ迄もない。然乍ら精確なる言葉を用ひて比較的詳細に述べたものとしては、心理學上に所謂ヴェーバー、フェヒナーの法則からゴツセンの享樂遞減の法則を経て、效用の遞減を説き價値の決定を説明せんとせる試であると云ひ得る。ヴェーバー、フェヒナーの法則に就きては説明の便宜上、後に心理學の發達を叙する際に之れを説き度い。

ゴツセンの根本思想の一たる享樂遞減の法則が如何なる程度に於て、之等生理學者、心理學者の所説に負ふものであるかは其書の中に於ては知り得ないやうである。ヴィーザーの如きは之れをゴツセンの法則と名付けて、至大の效績を此人に歸さうとしておるけれども、惟ふにヴェーバーの説から此説を抜き出すことは唯々數歩にして足りる。而已ならず類似の考は既にベンサムに依つても述べられておる。即ち曰く、人間が既に所有する財物の量大なるに従つて他の分量を附加するに由つて受くる幸福の量は小なりと。(Bentham's Works, IX, p. 18.)

假令フェヒナーの補正は其後なりとするも、ウェーバーが初めて此法則の緒を立てたるは一八二五年であつたと云へば、此書の出でたるに先立つこと殆んど二十年前のことに屬す。従つて氏が斯かる説の存在を知らなかつたと推定することは困難である。此書の劈頭には人間は其生活を享樂せんとし、其の生活の享樂を最大ならしむることを以て目的とし、其生涯の享樂の總和を最大にするやうに其行爲を調節す、と述べて快樂主義的立場を明かにしてゐる。而して享樂に關しては次の如き普遍的な特質があると云つた。即ち

一、同一の享樂を間斷なく續くるときは享樂の大きさは漸次減少し遂に飽滿に達する。

二、同一の享樂を時間的間隔を置きて繰返へす時は享樂は遞減するばかりでなく、繰返へさるゝ享樂の大きさは前の享樂の最初の享樂の大きさよりも小となり且つ享樂の持續も減少する、繰返へさるゝこと屢ばなるに従つて最初の享樂の大きさ及び享樂の持續は愈々減少する。(S. 146)

是れ享樂遞減の法則として知らるゝものである。即ち此の法則は第一次の最高最密の享樂から出發して享樂感受の各次の單位に於ける減少を説いて、享樂感受の多きに従ひて享樂は減ずると云ひ、限界効用説は財の量大なるに従ひて其れにより充たさるゝ欲望の強さは小さく、効用は小なりと説く。兩者相似の關係は自ら瞭かであらう。而已ならずゴツセンも又明かに物財の量と價值との關係に就て次のやうに記してゐる。價值を有し得る總ての物に就て其の一定量のみが價值を有するものであつて、此の點以上に其量増加するときは價值なきに至る、分量の増加と共に斯かる無價值に近づき、第一單位は最大の價值を有し次いで加はる等量はより小なる價值を有し

終に無價値に進むと。(S. 33.) 而してゴツセンの法則も後に限界効用説に就て述ぶるが如く、數字的精確さから截り離し、傾向の法則として觀るときに其意義を示すものである。

限界効用説に謂ふ所の効用は主觀的な個人的概念であつて、客觀的な物財の作用や一般的な有用性などではあり得ない。然るに主觀的な効用は元來數量的に之を測定するとは出來ないものである。一つの効用が同様の若くは異なる分量の物財から得らるゝ効用と等しいか、大きいか又は小さいかと云ふことは出來るけれども、一つが他より何れだけ大いか小さいかと云ふことは出來ない。此處に測定と比較との區別が存在するのであつて、分量は之れを等しい單位部分に分ち得る場合に於てのみ測定することが可能である。物財が人間に與ふる客觀的な力や作用は重量時間大ききその他の單位に依つて之れを測定することを得れども、其れによつて人間の受くる主觀的な効用は測定することは出來ない。之れは度合の増加若くは減少を比較的に排列し順位を付することは出來ても、効用の單位量に分割することは不可能であつて、相互に數字的關係に立たしめることを得ない。従つて効用の量を物財の量に關係せしめて決定することは謂れないことである。斯くの如く限界効用説から數字的精確さを取去つて唯一つの傾向の記述に過ぎないとする自分にとつては、此説を以て價値を説明する根本測度とすることや、全部効用は各部効用の總和であるか但しは最終効用と單位數との相乘積であるかとするなどとは問題となつて來ない。加之人間各自の感性嗜好等は異なるが故に、各人の主觀的な効用判斷を比較する道はあり得ない。

此の説に於ては特定人の特定財に對する欲望に或限度の存在することを前提し、而して其の財は此説を説明し

得るに都合のよい均一な單位に分割し得ることを想定してゐる。而して之等の總ての事情を看過しても此説によりて説明し得るものは、享樂財に就て其主觀的使用價値の範圍を出でない。斯くの如く解し來るならば、限界效用説は其の經濟學上の意義が心理學派の人々の言ふ所と著しく違つて來て、之れを以て價値の問題を決定せんとするが如きは想ひ及ばぬこととなる。此の説に就ては詳しく卑見を述べて見度いので他日稿を更めて詳論するにしよう。

次に數學派の説を以てしても、理性を有すると同時に感情や暗示性に富むてゐる人間の行爲を、數量的因果關係で説明し悉くすることは出來まい。人間の行爲や生活が如何なる程度迄數學的に説明し得るかは、我等の尙ほ容易に理解し難い疑問に屬する。固より數學派の人々と雖も多くは此理を認め、人間は自らの性向に自由に従ふものなることを認容して、唯與へられたる手段の中から最大の満足を得んが爲めには、又其の途上に横はる障害に打勝つが爲めには如何に行動するやを究むるのみ、多數の個人の行爲は同様の環境の下に於ては等しく計出し得べきことを主張するのみであると云ふ。マーシャル自らそう云つてゐる、經濟學上最有效なる數學の應用は簡單にして少許の符號を用ふるにあり、而して其は極りなき複雑を言表はすことを目的とせずして、寧ろ經濟の大運動の或小部分に明かなる光を投ずることを目的とする。(Marshall, *Distribution and Exchange in Econ. Journ.* March, 1898.)

更に深く之等の學説の枝葉に立入つて論評を試むることは此稿を起した企の範圍外に立つ。今此の兩學説が據

つて以て立つ所の快樂説が、心理學上から觀て如何なるものであるかを述べて見度い。快樂説は其初めキレーネ派の祖アリストイッポスによりて説かれ、所謂花園の哲學者と呼ばれたエピキュラス派に至りて前者が直接現前の快樂を最も重しとしたるに反して、精神的永久的消極的快樂の尊貴を唱へた。其後主として英國に傳はつてホツプス、ロツク、ヒューム其他の感覺論者を経てベンザム、ミル父子に至つて系統立てられ、十九世紀の大部分思想界を騒かした所の學説であつた。倫理學上哲學上には此説は痛撃を受けて今日其の鋒銜を收めておるが、心理學上如何なる價值を有するか。實驗的科學的研究に基く心理學及び生理學の到達した所によれば、快樂苦痛の感情は行爲に先つものにあらずして其れと伴ひ若くは其れに隨ふものである。云ふ迄もなく感情は行爲を制約する、即ち行爲に由りて起さるゝ感情が快きときは行爲は勢付けられ苦しいときは阻止せられる。然乍ら之は快樂苦痛が行爲の源泉であると云ふのとは異つておる。人間は快樂を求め苦痛を避ける、此の快樂が行爲の源となると此の學説は教ゆるけれども、快樂も苦痛も求めてゐた對象に達した上に獲られ、避けんとしたものに逢着した上に被むるものである。快樂であるか苦痛であるかは其の對象を経験した上でなければ感じられない。行爲以前に有し得るものは快樂及び苦痛其れ自らではなくして、之等に對する豫想でなければならぬ。人間を行爲に導くものは此の快樂及び苦痛に對する豫想でなければならぬ。屢々引合に出される譬ではあるが、凡そ車を馬に曳かしむるが爲めには馬は必ず車の前に繋がれねばならない。快樂説は恰も車を馬に曳かしめんと欲して車を馬の前に繋ぐの類であつて、此の所の因果の關係を謬つておる。而已ならず快樂と云ふものを如何やうに解するか、其の

解釋によりては人間は必ずしも快樂を趨うて動くものではない。

且つ之等諸學說の據つて以て立つ所の心理學的智識は内省によりて組立てられたる主觀的なる個人心理學に屬するものであつて、發達し來れる今日の心理學說と必ずしも一致するものではない。斯くの如く單り獨斷的なる主觀的個人心理學にのみ倚賴することは、心理學的と稱すべく餘りに偏局せるものたるを免れない。

三

快樂主義派經濟學の心理學的根據を窮むるが爲めには、更に翻つて心理學發展の經過の概要を觀ることを必要とするものであるが、近頃リーフマンが *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*. 1917—9 二卷を出し、自ら以て心理的なりとなし、一般の學者亦多く之を近時の代表的快著として心理的傾向を有するものと認容するやうである。本論稿を起した主旨から云へば論を其所まで運ぶの要を見ないけれども、氏の所說と快樂主義派經濟學說とは其の根底に於て相通ふところがあり、其の傾向亦相似たるものあるが故に此所に其の概要を紹介し短評を試むるのは無用の事ではないと思ふ。氏の所論の概要は若くは其の骨子は、既に數度の機會に於て發表せられた論文に於ても窺ひ得る所であるが、今主として原論第一卷の中から心理的なりと唱へらるゝ所以を理解するに必要な程度に於て、其の概略を抜いて見ればかう云ふのである。

従來の經濟學說は全く謬れる見地の上に立ち、技術的物質的數量的觀念に囚はれて經濟學を以て物財の調達

Sachgüterbeschaffung」とする。従つて經濟と生産とを混淆するものである。經濟學上にも夙に客觀主義と主觀主義との對立を見、其の中心問題をなす價值價格に就て觀ても前者は之を生産費に歸し後者は之を限界効用に歸せんとする。然乍ら氏の見解に従へば之等は未だ共に客觀的のものたるゝ免れない。經濟現象は純主觀的な欲望から説明さるべきものであつて、技術的に打ち立てられたる價值概念からではない。其の結果は之れ迄經濟學をして一個の財の學たらしめた。經濟は人間の外的自然の對象に對する關係ではなく、心理的のものであつて考量 *Erwägungen* の一種である。即ち費用と效用、享樂と犠牲、快樂と苦痛との比較考量であつて、最大の欲望充足を目的とするものである。經濟行爲は斯かる考量の下に起り、經濟關係經濟組織は斯かる考量から起る。經濟學の基本概念に就ても古典學派はマーカンテイリズムが貨幣の内に認めた國富から、貨幣が購ふ物財の概念に進むだ。之等は初めから物財、生産に就て考へ經濟行爲の目的は可能的最大量の生産にありとするが故に、經濟活動と生産、經濟と技術とを混淆し、經濟に就て數量的物質の見解をとるに至つた。近時尙ほ此見解は支持されてゐるが之に依つて經濟の本性は理解し得べくもない。十九世紀に入りてより特にリカード以後、財概念なる純然たる客觀的なるに代えて基本概念として一層主觀的なるものを求めるやうになつて來て、選ばれたものが價值であつた。然乍ら勞働や生産費に依て之を説明することは依然經濟と技術とを混淆するに外ならない。又效用と稀少性との上に立つて限界效用説を説く主觀價值説も、從來の數量的物質の見解に避くべからざるものたりし客觀的要素を常に包含してゐる。即ち效用や稀少性の要素を導き來ることは、畢竟するに主觀的なりと信じて

打立てたる價值說の中に、客觀的物質的數量的觀念を引入るゝものである。此の説は與へられたる物財の量を根底に置き之により價值を定めんとし、物財を欲望充足に當り犠牲に供せらるゝ費用として考察する。従つて主觀的なる效用享樂から出發するものではなくして、費用によりて價值を説明し決定せんとするものに外ならない。經濟學の基本概念たるものは經濟の本性及概念と最密接なる論理的關係に立つものでなければならぬが、價值概念は斯くの如き關係に立つものではなく、經濟現象の經過の中に成立する概念である。基本概念として物財及び價值を排したるが如く、又經濟、單一經濟を以てすることも排せねばならぬ。蓋し今日技術的物質的經濟觀の爲に人々は之によりて偏局的に貨幣所得に向つて努力する營利活動のことを考へ、經濟の他の一面たる消費經濟を等閑に付するが故である。我等の觀るが如く經濟的 *Wirtschaftlich* の概念は消費經濟から引き來らねばならぬ、其中に斯かる考量は先づ歸結を見出し其中に我等は先づ經濟的本性を見るからである。出發點若くは基本概念として適當なるものは、經濟行爲若しくは一層一般的に云へば形容詞としての經濟的なる概念であつて、之は經濟行爲、經濟關係、經濟組織等種々の名詞と結び付き得る。

今氏の見解に従へば經濟は心理的のものであつて欲望充足を最大にするの目的を以て種々の效用を其の費用と比較考量することである。換言すれば極大原則 *Maximumprinzip* に従つて種々の效用と費用との間に *Proportionalssystem* を置くことである。人間の勞働能力費用支出能力には限あるが故に、經濟の目的たる最大の效用總量を得んが爲めには、經濟主體は多くの費用を個々の欲望に用ふることなく、之を合目的に分配しなければ

ならない。經濟の目的は茲に存在する。此の場合重要なことは各用ひられたる費用單位と得られたる效用單位とに於ける費用と效用との關係であつて、效用の費用に對する超過部分を氏は收益と呼ぶ。而して之が營利經濟の場合にありては、心理的費用效用の比較の代りに貨幣量を以て言ひ表はされ對立される。經濟行爲の動機は欲望の充足享樂にあつて、何の快感かに人間を努力せしめ經濟行爲に導く。經濟の目的が既に心理的なる欲望充足費用である以上、之が手段として之に對立せしめらるゝものも亦物質的數量的のものでなくして、心理的な不快費用でなければならぬ。從來の經濟學説は皆此の主觀的なる費用概念の欠缺の爲めに蹉跌してゐる。

リーフマンは又更に技術と經濟との區別を明確にすることが氏の立場を明かにする所以であるとして、之に關し從來幾多の學者の擧げた見解を排し去つて、概括して之を次のやうに云つてゐる。兩者は共に合理主義 Rational-prinzip の顯現の形式であつて

一、廣義に於ける合理主義即ち目的に就ての若くは手段に就ての比較。之れに二つの場合がある、一は目的が與へられて之に就ての手段が問題となり比較せらるゝ場合、即ち最小手段主義の場合であつて、他は手段が與へられてゐて其を合理的に應用し多くの目的を達することが問題となる場合、即ち最大效果主義の場合である。

二、狹義に於ける合理主義即ち目的と手段との比較。一は技術の本質をなし二は經濟の本質をなす。技術は處置の方法であつて、處置の方法と其結果、生産手段と生産物等の比較はあり得ない。經濟は二重の比較であつて合理主義に從つて之等の兩者を比較し、最小費用と最大效果、手段に對する目的の超過、費用に對する效用の超

過を齎さんとするものである。此の經濟と技術との中間に氏は又經濟的技術なるものを認めてゐる。

經濟主體の目的は斯くして收益を獲得するにある。従つて可能的多量の收益を獲得することが問題となつて來るが、如何にして其の目的は達せらるゝか、此の場合リーフマンはゴツセンが享樂遞減の法則から導き出した限界享樂均分の法則 *Gesetz des Ausgleichs der Grenzerträge* を基礎として、更に限界收益均分の法則 *Gesetz des Ausgleichs der Grenzerträge* を立て極めて大なる重要を持たせた。今先づ事の順序としてゴツセンの法則を簡単に述べなければならぬ。

ゴツセンは先きに述べた享樂遞減の法則から重要な三個の定理を導いて來たが其の中の一に曰く、多くの享樂に就て選擇の自由を有し而かも總てを完全に享樂するに足る時間を有せざる者が享樂の最大量を得んが爲めには、總てを部分的に享樂し而かも享樂を止むる時に於ける各享樂の大きが均一なるが如き關係にあらしめることを必要とすと。(S. 101) 是れ限界享樂均分の法則として知られておるものであるが、此の法則の足らざることは偏局的にたゞ享樂の方面のみを觀ておることであるとして、リーフマンは費用と效用の兩側面を對立比較せしめねばならないと説き、此の法則を補正し此の法則に代ふるに限界收益均分の法則を以てした。其要旨に曰く、孤立せる經濟主體に於ても交換經濟に於ける消費者に於ても、問題とする所は效用の絶對量にあらずして費用と效用との對立比較、兩者の關係にある。而して多くの種類の欲望を有する經濟主體が其欲望を絶對的の強さに應じて享樂せず、費用と比較して各財最終單位の收益、換言すれば最後に用ひられた費用單位若くは最後に得られた收

用單位による費用と效用との關係、即ち限界收益が等しきやうにする時は、同量の費用を以て得らるゝ収益は最大なりと。

茲に注意すべきことは、リーフマンは前には屢々収益は效用の費用に超過する部分とせるに拘らず、此の場合に於ては費用と效用とを比較し、其の關係割合を求めて限界收益の概念を定めておることである。此點に就ては氏が一九一七年のコンラード年報誌上に此の法則を掲げたとき、エングリスが同誌上で論理的矛盾として指摘した所であつた。原論の四二四頁以下で氏は此の問題を斯う解いておる。費用と效用の差と見るか比と見るか、之れは孰れも正しい、兩者畢竟其の出發點の異なる所から來る。經濟は種々の費用と效用との比較なりとするときに、其の結果たる収益は自然比較概念である。蓋し此の場合には種々なる費用を之によつて得らるゝ效用と比較し、従つて各場合兩者の關係が考へらるゝのであるが故である。然乍ら個々の欲望と其費用とが考へらるゝ場合には、個々の享樂と之を得るに要せらるゝ犠牲とが對立せられ、従つて収益は得られたる效用の費用に對する超過部分であるが故に、収益は此の場合差として觀念せられると。

交換經濟に於ては各人は先づ他人の欲望充足の爲めに費用を投ずる。然し其は交換に依つて彼自らの欲望を充足することが出來、而かも自己の欲望の爲めに直接に働くよりも一層よく欲望を充し得ると期待するが故である。經濟主體は先づ營利經濟に於て可能的大なる營利収益を追求し、之を費用として消費經濟に於て、限界収益均分の法則に従つて最大量の消費収益を追求する。營利經濟主體は其經濟に於て、營利収益を得ると期待する限り勞

働と資本を投じ、此處にも亦限界収益均分の法則は行はれる。而して營利經濟に於ては費用も效用も従つて收益も貨幣額を以て表はさる。斯くの如き經濟概念収益概念を以てして、初めてよく需要供給や價格所得の諸問題も解決されんとするのが氏の主張である。

リーフマンの所説の細目に立入つて紹介批評することは、今此の小論文の任ではない。唯氏の全體の傾向が心理的若くは心理學的なりと稱せらるゝ所以と、而して如何なる意味に於て然るかを理解するに必要を限りに於て、以上其の概要を抄説した。其根柢に於て快樂説を認容しゴツセン、ゼヴオンス等の所説と一脈相通するものなることを看取することが出来やう。由來快感不快感の比較考量の如き之を精確なる數量に依つて測定すること能はざるものなることは、既に限界効用説の所で述べた。然るに營利經濟に於ては之等快感と不快感、即ち費用と效用が貨幣額によりて云ひ表はされ、數量的に取扱はれることゝされておる。消費經濟に於ける比較考量は統一的單位に分割し得ざる測定の出來ない分量的程度の比較であつて、營利經濟に於ける比較考量は統一的單位に分割し得る數量的測定である。従つて兩者は其の本質を異にし一方の概念から當然に他方の概念に引き展ばして行くことは出来ない。現にリーフマンの理論的基礎別けても限界収益均分の法則の如きも、計數し得る數量的假設例を引き來らねば説明出來ないではないか。然乍ら斯かる數字的取扱が比較考量の本質から觀て常に可能なことであるかどうか。次にリーフマンの心理的立場を批判したヴィヤーマンは次の如く云つておる。經濟學の研究には個人心理及び社會心理兩方面の考察を必要とし、各々研究せんとする問題によりて其何れに據るべきかの區別を

生ず。價格の起源の問題の如きは個人心理的に説明すべく、交換經濟に於ける多くの問題は社會心理的に究明しなければならぬ。リーフマンの經濟學說に於て特に著しい缺點は、社會心理的研究の缺如したる點にあると。(Conrad's Jahrb., Mai, 1919, S. 584-9)我等は不幸にしてグライヤーマンの所說にも直ちに首肯することが出來ない。問題によりて夫々個人心理的社會心理的立場を必要とすとなせる其區別の基礎何れに在りや。又リーフマンの所說に於て缺如する所は後者の考察にして、前者の考察に就ては妥當なるかの如く見ゆれども、此の説果して其の儘に認容すべきものなりや。氏の所說を心理的なりと稱する所以は、消費經濟に於ても營利經濟に於ても經濟の根本原則は同一にして、經濟主體の心理的考量を以て總ての經濟行爲を説明し得とするに由る。我等の觀る所を以て言はしむれば、リーフマンの所說を通じて色濃く見出し得るものは個人的主觀的傾向であつて、我等を満足せしむべき心理學的傾向では斷じてあり得ない。

以上リーフマンの所說の概要を紹介し、心理的若くは心理學的傾向と稱せらるゝ所以を簡単に檢索した。今論を元に返し快樂主義派經濟學說の心理學的基礎をより明かにすべく、最近心理學發達の一斑を叙べて見度い。

四

翻つて快樂主義派經濟學說發生の頃を按ずれば一八七〇年代であつて、心理學に於ても亦正に此時を以て一轉機を劃さんとした時代である。言ふ迄もなく心理學も遠い昔から變遷發達を遂げ、特に十九世紀一般科學思想の

發達に影響せられて、其の研究の態度方法を變じ一の經驗科學となつて來た。詳しく立入つて心理學の歴史を語ることは此の短篇の性質上避けねばならないが、議論を進める上に必要な程度に於て簡單に其の梗概を述べねばならぬ。

希臘哲學以來永く靈魂の學、心の哲學として取扱はれて來た此の種の學問を、形而上學の境から蟬脱せしめて經驗科學の方面に引入るゝに與つて力となつたものは、實は此學問其れ自ら内にはなくして却つて外から來た。生理學及び生物學即ち是れであつて外に醫學及び人類學等がある。

生理學は十八世紀の初めから著しい發達を見、身體の各器官に就て多くの實驗が行はれた。就中眼の構造及び視覺に就ては早く其研究が進むだ。特に十九世紀の初め即ち三二二年にプラトールが素朴な活動畫の模型を作り、其の翌年ホキートストーンが實體鏡を發明したことは、生理學上の問題としてゞはなく心理學上の興味深い問題として注意を惹くに至つた。聽覺に就ては其の研究も割合に乏しかつたが、觸覺、距離溫度重量の知覺特に差異の知覺に就ては、一八二五年ヴェーバーが多くの實驗の後重要な發見をして所謂ヴェーバーの法則を立てた。之は一般に社會科學の上にも大なる意義を有するものと信するが故に、簡單に其の内容を云つて見れば、二個の刺戟が其の差異を辨別せらるゝが爲めには、其の間に少くとも或限度の差異を有することを必要とする。此の差異を名づけて限界刺戟量若くは刺戟差別閾 Liminal stimulus difference or Differential threshold of stimulus と云ふ。而して或る刺戟の量と其の限界刺戟量とは一定の割合を保つ。換言すれば二個の對象間の識別し得る限

界的差異は、其の差異と對象の分量との割合に係り、對象の分量間の絶對的差異に倚らない、と云ふのである。此事はヴェーバー自ら試みた手にて重さを揚ぐる場合、皮膚に對する壓力及び眼にて線の長さを比較する場合等のみならず、我等の日常經驗に於て、屢々見る所であつて、二個の經驗の根柢に横はる生理的基礎、即ち特定の神經活動が單に其の分量程度を異にするのみなる總ての場合に其の適用を見る。此の法則は刺戟の量が中庸を得たる場合に於てのみ、即ち一定の限度内に於てのみ適用を見るものであつて、若し刺戟が餘りに小なるか又は餘りに大なるときは適用を見ない、蓋し此場合に於ては差別關の問題ではなくして感ずるか否かの絶對關に達するからである。

フエヒナーはヴェーバーの法則を一層詳しく檢證し、其の重要を力説し、數學的推理に依りて刺戟と其れによりて起る感覺、即ち物質界と精神界との間に確定的な數量關係を打立てんとした。之を簡單な言葉で云へば、感覺の分量密度は刺戟の分量密度に應じて變化するけれども、直接に同様の割合を以てしない、感覺が算術的等差的に増加せんが爲めには刺戟は幾何的等比的に増加しなければならない。換言すれば感覺は強さに就て刺戟の對數に比例すると云ふのである。フエヒナーは一八六〇年に出した *Elemente der Psychophysik* の中で之を心理的測定法則 *Massgesetz* と名づけ、一般にはフエヒナーの精神物理的法則として知られてゐる。一體物理學的其他自然科學的色彩が人間及び社會の研究に取入れられて來たことは、此の頃の著しい現象の一つであつて、斯様な名稱は實は當時の學者の好むで採用したものゝやうに見ゆる。近世社會學の祖コンントが社會學に與へた最初の名前

も社會物理学と云ふのであつて、sociologique と云ふ言葉が用ひらるゝに至つたのは、其の實證哲學の第四卷に至つてからであつた如きことも併せ考ふるの値がある。フエヒナーの此書は其の名の示すが如く、氏の哲學的思索と科學的經驗主義とが合一融和されて出來上つたものであつて、其後ヘルムホルツ初め多くの學者によりて氏の説は批評も批難もされたけれども、氏は頑強に之に抗爭し而して云つた。バビロンの塔は工人等の如何に之を築くべきかに就て一致せざりしが故に完成しなかつた、予が心理學的構造は之を毀たんとする工人等の一致せざるが故に残るであらうと。後年氏はヴント哲學研究の第四卷の中に、心理的測定法則とヴェーバー法則との關係に就ての論文を載せたが、ヴントは之を氏が此事に捧げた四十年の間になした、此の問題に就ての最も明確な完壁の記述であると云つた。今自分は心理學の問題に深入りするの邊はない。唯限界效用説が其の基調におく根本の思想が、之等の法則と如何なる程度に於て交渉してあるかを提示し、併せて又近代心理學發展の過程を示すことが出來れば茲に引證した目的は達せられる。

生理學者であるヘルムホルツは又一層心理學的になつて來て、一八五〇年初めて反動作時間 *Reaktionszeit* の測定をし、神經傳導の速度を測つて精神作用の時間に關する實驗の嚆矢をなした。永い間精神作用は餘りに迅速であつて到底測定は出來ないものと考へられ、一八四八年に至つてもデュ、ポア、レイモンの如き迄が最大の動物に於てすら神經纖維は極めて短く、運動は極めて迅速であるが故に、測定は不可能なものだと結論してゐた。然るに其後僅に二年ヘルムホルツは精確に之を測るに成功し、初め蛙の運動神經の傳導速度に就て研究し、更に人

間に就て研究を續けて其の感覺及び運動神經の傳導速度を測定し、熱は此の割合を高め寒さは之を減ずるとした。此の研究は其後種々の方面に研究の道を開いて、生理學心理學上に極めて重要な役目を演じ多大の効果を擧げてゐる。

斯くの如く一方に於て生理學者が心理學的に進むで來る傍に、形而上學者として心の哲學を取扱つた人々の間にも例へばアレキサンダー、ペインの如く、次第に經驗的になつて來る者が現はれて、斯くて生理學と舊來の心理學との接近は促進せられ更に一層の融合を望むでゐた。是れ十九世紀の中葉特に七〇年代に至る迄、即ち快樂主義派經濟學の樹立せらるゝ頃迄の心理學の狀況であつた。此の時に方つて接近し來つた此二つの潮流を最巧に調和し、斯學の基礎を堅固に据附けた學者が獨逸に現はれた。ヴント即ち是れであつて、一方ヘルムホルツ、フェヒナーの影響を受けた生理學者であると同時に、他方ヘルバート派の哲學を修めた人であつた。其の著 *Physiologisch-Logisch Psychologie* の初て出たのは一八七四年であつて、ライプツヒ大學の教授となり七八年同大學に心理學實驗場を建てた。之が此の種の實驗場の權輿をなし、其の門下から若くは其れに倣ふ多くの學者が出て、實驗的研究に基く生理學的心理学は愈々隆盛に赴いて來た。然乍ら實驗的研究も初めは感覺及び知覺の問題に限られてゐたが、エビングハウスが記憶の問題を實驗的に取扱ひ、其後次第に習慣、學習作用、聯想、感情惹いては思考意思の問題をも其の範圍内に引入るゝに至り、今では實驗心理学は心的作用の諸方面を蔽ふに至つてゐる。

生物學の發達に伴ひ起源及び發達に關する觀念、即ち發生的觀念と發生的研究方法とは心理學にも取入れられ

てより、發生的心理學、兒童心理學、動物心理學、民族心理學等の特化發達を見るに至つた。即ちラマアクは進化の一要素として動物が自らを境遇に適應せしむる心理的努力の觀念を認め、ダアウキンは自然淘汰說に照して本能、情緒表現、性的選擇、適應等の動物の心的狀態を説き、更に此見解を人間に擴充するに至り、ウオレースも進化に及ぼす心的要素の地位を認め、動物間の摸倣、遊戲、同類認識其他心理學的價値ある研究を遂げた。動物の習性心的生活に就てはブレイム、ロマーネス、エスピナ、ロイドモルガン等の興味多い研究が出たが、之等は皆叙説研究の方法が物語的から觀察的に移つた迄であつた。之れより更に一步を進めて觀察的から實驗的に移り、實驗心理學と心的發達に關する生物學的興味とを結付くる先達となつたものは二十餘年前米國に起つた。

ソーンダイク等はその劈頭に立つ。之等の學者は微生有機體から猿に至る總ての動物に實驗的研究を應用せんとするのであつて、勿論比較的觀察が他の動物から人間に推擴げらるゝ時其れから得た結果は特に興味あるものとなる。兒童研究も次第に科學的になり傳記日記から材料を得、試問法觀察叙述等の方法に據りしものも實驗に俟つもの尠からざるに至つた。近頃一部の學者の間に稱へらるゝ行動主義 Behaviourism の心理學は、心理學を以て動物の行動を研究するものとなす學說であつて、全然客觀的に實驗的に之を研究せんとするものである。

以上心理學と生理學生物學との關係を述べ、其等の助けを受けて最近半世紀心理學が全く經驗的科學的となり來つた經過を明かにした。心理的要素を最も多分に有し心理學的智識の上に樹立せられたと稱せられて來た快樂主義派の經濟學が、出來上つた頃の心理學は如何なるものであつたか、而して又其が據つて以て立つた所の心理

學的智識の如何なるものであつたか、上述する所に由つて了得さるゝであらう。即ち之等經濟學說の根柢が培はれ其の上に立脚したる心理學說なるものは、半世紀前の素朴なる學說に屬する。心理學は其頃から特に急速の發達をなし、又現に次第に發達の道を辿りつゝある。其の基礎と頼みしものゝ遙かなる彼方に進み行くを悟らずして、其の上に打立てたる學說に執着し、己が基礎依然として固しとする者があつたならば、夫は爾か思ふ者の愚かさである。心理學派の經濟學、快樂主義派の經濟學既に顧みるに足らず、人は云ふ。其の顧みられざることを我等は憾まない。心理學に立脚すると云ふからには一方に於て心理學の不斷の發達の流に棹して、經濟現象經濟生活を討究して行かねばならない。我等の満足し得る如き意味に於ける心理學的經濟學は未だ存在すべくも見えず、之から組立てらるべきものである。

五

人間生活の一方面、社會生活の一部門を取扱ふ經濟學と、心理學と常に密接なる提携關係の上に置かるべくして、而かも尙ほ我等の望む所に到達することの出來てゐない理由の一半は、經濟學を取扱ふ人々の上にあつたであらうけれども、一半は云ふ迄もなく心理學者の上にある。是れ種々の事情の結果であつて學問の歴史を顧みて誠に已むを得ざりしものとしなければならぬ。人々が社會生活の複雑なる現象に着眼し初め之を心理學的に究明せんとした時、先づ眼前に展げられたる問題に注意を集中して、之を形而上學者が永い間の努力に困りて積上

げたる多少空漠たる原則から、演繹的に説明しやうと求めたのは已むを得ない所であつた。即ち人間の心的過程に就て其の根本的組成、社會的作用等に透徹した理解を得やうとするよりは、尙ほ依然として根本的なりと鑿り考へられたる不確實なる原則から社會現象を説明せんと續けた。之等當面の要求を措いて一度先づ其の根底に下り、將來自らの學問を其上に建設すべき準備的基礎を築くことに其の努力を向くることは、望み得ざりし所であらう。實は假令經濟學者若くは一般に社會科學者が目前の要求を措いて、斯かる方面に進まんと欲しても、望むが如き心理學説を見出し又之を組立つることは不可能のことであつた。

永く形而上學の範圍に立籠り内省を以て唯一の研究方法とした心理學が、十八世紀から十九世紀に亘りての科學的研究の大潮流に乗せられて來てからも、尙ほ心理學者は自己の學問に獨立科學としての地位を確保せしめ、他の學問から嚴格に自らを區別せんと努めて、其の範圍に就て餘りに狭い見解をとり之を意識の學とするに満足した。蓋し意識狀態を分析し記述することは、他の如何なる學問によりても企てられざりし心理學固有の部分であつたからである。由來意識狀態の分類分析複合、心理的過程と生理的過程との關係、或は又認識的知的過程の問題と云ふが如きは、社會現象を取扱ふ人々にとりては重要は寧ろ尠ない。直接重要な存するのは行動の起源、心理的生理的活動を促し之を調整する衝動々機、惹きては之等が社會制度社會に於ける個人相互の關係を支配する方法等である。從來心理學が主として軼はり進歩した學説を樹立するに成功したのは、寧ろ前者の問題に關してであつて、後者社會的により重要な問題は寧ろ不當に之を閉却してゐた。其後心理學は次第に諸種の科學の

刺戟と援助とを受けて、新しき精確なる研究法により、一層廣き見解の上から心的生活の根柢を詮索するに至つた。特に最近心理學の發達は益々人間の行動、意的情緒的過程及び其等の社會的關係の方面に向けられつゝあるが故に、其處から社會現象の究明に一層重要なる鍵が見出されなければならぬ。

我等の満足し得る心理學的經濟學、即ち心理學に立脚する經濟學は、斯くして發達する心理學より不斷の暗示と援助とを得來らねばならぬ。此意味に於ける經濟學は之れから伐拓いて行くべき *Terra incognita* として、我等の前に展開されてゐる。今心理學を經濟學經濟生活に取入れ、兩者に關係を結付けんと欲するに當り、二個の場合の可能を想見することが出来る。一は經濟學經濟現象の説明に心理學を用ひんとするものであつて、他は經濟生活上に於ける或目的を達する爲めに有效なる手段を見出すべく、心理學を應用するものである。前者は經濟學に對する心理學の理論的應用であつて、後者は經濟生活に於ける心理學の實際的應用であると云ひ得る。前者を心理學的經濟學と云ふ名稱の下に呼び得べくんば、後者は經濟心理學なる稱呼を與ふことを得る。煌々たる光に照されたる如き經濟學にも尙ほ暗黒は存在せずや、さゝやかなりとも燈火を其の一角に點することは予が今後の仕事に屬する。(大正一〇、一一、二六、)

高 垣 寅 次 郎